

2020.12.26 大刀洗町住民協議会

# 住民主体の公園づくり

学校と地域の融合教育研究会会長  
宮 崎 稔

## 前回の感想から

(私の心にとまったもの)

- 1 …私たちの力で公園を少しでも使いやすく、多くの人たちが利用しやすいように考えていくるなんてすごくいいなと思いました。
- 2 素人の意見を聞いて町を動かす住民協議会だった…
- 3 遊びを工夫すると怒られるので子どもたちは行かなくなったり。
- 4 コンセプトから改めて作り直すぐらいの考え方意見を出していただきたい。(コーディネータ)

もし・・・

住民だけで

公園を管理することに

なったら？

できますか？

でも、

「公」とは

なんでしょう

やってもらうのではなく、  
自分で動き出すこと。

「公」の正解は、  
誰かが決めるのではなく、  
自分の中にある。

やることで  
自主的な管理をしよう。

何でも行政任せにするのではなく、

行政が、やれることと住民がやれることを分けて考えましょう。

- 槻をつくったり、きれいなトイレにすること；  
行政がやるのは当たり前
- 問題は、その後；  
それをどう使うか。住民の力が試される

例えば・・・

- 土・日は、  
**私たちが管理して、自由に使えるようにしよう。**
- 平日の 3：00 以降は  
**私たちが管理して、自由に遊べるようにしよう。**
- 私たちがいるときは、**  
自由に使えるようにしよう。
- イベントをやろう。

⇒ 次は、公園ではないが  
**「住民が」活動を仕切っている例です。**

# 校庭に300人集まった花火大会

## ■夏休み間近の日に申し入れが

夏休みを間近にしたある日、ある保護者が校長室へ訪ねてきました。

「校長先生。夏休みに子どもたちは花火をします。でもこの地区はマンションも多いし、戸建ての家も庭が広くはありません。夏休みに一度くらいはマンションのベランダや狭い庭で花火をするのではなく、広いところで花火ができるように夜も校庭を開放していただけませんか？」

と言いました。私は、

「だれか大人は付きますよね。」

と念を押しました。

「もちろんです。バケツに水も用意しますし、安全には十分気を付けます。」

と言うので、許可を出しました。

## ■ドキッ、校門に一枚の貼り紙が

それからまもなく、校門に一枚の貼り紙が出されました。そこには、

**学校の庭で花火会をしませんか。**

**○月○日 ○時から。**

**花火は自分の家から持ってきてください。**

**大きな音がするものや遠くへ飛ぶものは禁止です。**

**責任者 ○○ ○○**

と書かれていました。責任者には校長室へ来た方のご主人が引き受けてくれて、**消防署にも届け出を済ませていました。**「ああ、そこまで考えてくれていたのか」と感心したので、次にお会いした時にそのことについて触れると、

「だって、校長の顔にドロを塗るわけにはいかないよ。こんなことを許可してくれた良い校長が教育委員会から怒られるようじゃ地域の恥だよ。」と笑顔で答えました。

## ■大人の交流にもつながる

まだ暗くならないうちから、続々と学校に老若男女が集まっています。後で聞いたことですが、早く来て途中で帰った人や後から来た人なども入れると、子どもと保護者だけではなく、2歳から80歳くらいの人が300人ぐらいいたそうです。

「校庭を借りて**集まれる人だけでいいから**来てやつたらどうだろうと思ったのですよ。それで校長先生にお願いすると夜の校庭を貸してくれたものでね。うちのカミサンが友達に電話をしていたみたいですが、もともとイベントとして何人を集めようとかいうものではないので、**うちの家族だけでもいい**と思っていたのですよ。」

という気楽な開始のあいさつで始まりました。

花火会は大いに盛り上がって、校庭のあちこちが明るく輝いたり子どもたちの歓声で包まれたりして、みんなが喜んでいるのがよく、ちょうどよい交流のきっかけを生んでもいるようでした

## 校長の顔に泥はぬれないよ

無事に済んだとはいえる、やはり火の始末が心配でしたので、翌朝早めに学校へ行ってみました。すると、向こうからバケツを持った大人が二人こちらへ歩いてきます。一人は責任者の人です。そうして、

「校長先生、おはようございます。これしか落ちてなかつたですよ。」

と言いながらバケツを見せてくれました。中には、花火の燃えさしが2本だけ入っていました。

「燃えさしはバケツに入れるようにとは言っても、もしかしたら外に捨てたりしている子もいるのじやないかと思って、**明るくなるのを待つて校庭をグルッと回つてみたんですよ。**みんなルールを守ってくれたんですね。」

と、うれしそうに話していました。

約束だからやってくださいというように規則でしばることも時には必要なことかもしれません、大人なのだから信じて自由に任せたことは、**大人の良識**を發揮した行動になって返ってきて、一層地域との絆が深まることにつながったように感じました。

## 放課後の校庭遊び(校庭開放)

駅に近い繁華街にある学校でしたから遊び場も少なく危険がいろいろと潜んでいました。そのころは多くの学校が「下校したら校門を閉めて子どもは学校へ来てはいけない」という規則が風潮になっていました。

しかし大久保東小では、逆に「放課後は地域で一番広い場所は校庭なのだから、学習道具は外に置いたまま校庭で遊びなさい」という決まりにしたのです。**教員には一切の迷惑が掛からないように**して、保護者や地域の方が交代で子どもの見守りをしました。救急箱も用意して、ケガをしたら学校の保健室へ行くのではなく簡単なものはその救急箱にあるもので治療してもらうようにしました。つまり、遊び場として校庭を借りてはいるものの公園と同じような広場の感覚で**自分の責任で対処する**というような約束で運営したのです。

校庭で遊ぶ子は保護者も了解しているというカードを当番の人提出するという仕組みをつくりました。こうして保護者も安心して、広くて慣れた校庭で存分に遊んでいる子どもたちの姿が見られるようになりました。遊び場として一番適している校庭が使える**システムを保護者と地域の知恵でつくり出した**のです。しかも教師には迷惑が掛かりませんから、学校からの異存はありませんでした。

## 「ケガと弁当は、自分持ち」

なんの写真でしょう？



## まき割りをしてから焼くヤキイモ会

秋も深まった頃に、

「ヤキイモ会をしたいと思うのですが、校庭を貸してくれませんか。」と言ってきました。

「落ち葉で焼くのではなく、木を燃やして焼くんですよ。」と得意そうに言いました。

「今の子はまき割りもしたことがないので、木をナタで割るところから経験させてあげようと思っているんです。それを燃やしてイモを焼くという計画です。」

ヤキイモ会当日は、濡らした新聞紙でサツマイモを包み、それをアルミホイルで包むと焦げすぎないでちょうど良い焼き加減になるのだそうです。一方、校庭の隅の方には、材木屋さんから集めた廃材が2か所に用意されました。小さめで割りやすい方には低学年が列をつくっています。心配そうに見守る母親と手をつないでいる子もいます。また高学年用にはだいぶ大きめの廃材と大きいナタが用意されています。父親の一人が実際に薪を割りながら説明しています。子どもたちからは、スパッと割れるたびに大きな歓声が上がります。早くやってみたいという気持ちと少し心配な気持ちが入り混じっているようです。

どの子も割れるたびにうれしそうにしています。高学年の方を見ては、「あのお兄さん、カッコイイ」と羨ましそうにしている子もいます。そうこうするうちに、ある母親がもう我慢できないという感じで、「私にもやらせてもらえませんか。」と言ってきました。

「いいですよ。」

という担当の人の声で、力いっぱいナタを振り下ろします。すると、

「うわあー、割れた。気持ちいい。」

と、興奮した感じで叫びました。その声につられるように、

「わたしも。」「わたしも。」

と、お母さんのための時間のようになってきましたが、ヤキイモ会の副産物にうれしそうな顔が溢っていました。

# ついでに七輪でサンマを

「出来上がったころに呼びますから、それまでは遊んでいていいよ。」

という声で、子どもたちは三々五々に散らばりました。

ところが、七輪とサンマを持ってきた人がいました。燃えている火の中から熾火を七輪に移して、なんとサンマを焼き始めたのです。

「今の子は、ガスコンロで焼いたサンマしか食べたことがないのじゃないかなと思ってさあ。」

とだけ言ってサンマを焼き続けます。ひとしきり遊んだ子どもたちが、

「なんの煙？」

などと言いながら集まってきました。

「サンマだ。サンマだ。」

「焦げてるよ。」

「でも、いい匂い。」

などと、口々に見たことを興味津々に言い続けます。初めて観察したことを発見したのが嬉しいとでもいうように、だんだん大きな声になってきます。

「あれ、火の所からまた燃えてる。」

「ほんとだ。自分の体から油を出すから、それが落ちてまた燃えるんだ。」

「サンマが、自殺してる～。」

この言葉には大人が噴き出したり感心したりしてしまいました。**先生ではない人との自由な空間**が子どもの心も開放しているようです。

「食べるかい。」

という声で、

「焦げているところもうまいよ。」

とか言いながら全部食べきってしました。

こういう活動は、

実行委員になると苦労して何でも準備をする一方、その他大勢の参加者はお客様のようにして集まってきたは、「面白かった」とか「面白くないからもう来年は来ない」というように評価する側に回るというのが一般的なやり方です。

でも、大久保東小学校のやり方は、

- ・花火は自分で持ってこさせる・子どもにまき割り体験をさせる
- ・サンマを焼くところを見せる

というような大人の自由な発想が実行できることに一つの特徴があります。

それを周囲の人も認めて応援したり、

また自由過ぎるときには歯止めをかけたりする配慮ができる事にも特徴があると思います。

地域には、多彩な人がいます。大久保東小学校では、

- ・それぞれが自分らしさを發揮しがらも大人であることをわきまえているという成長したコミュニティの姿を見る事ができるように思います。

このような自由度と良識のある姿は、コミュニティ活動の根幹であるように思います。

とかく、

「計画にないから」という責任者のひと声で個々の判断は押し殺されてしまいがちですが、  
「私の発想を皆さんも認めてくれて、また子どもも喜んでくれた」ということはやり甲斐につながり、  
積極的にコミュニティをよくしていきたいという人が増えることにつながると思います。

「でも、ルールを守らないと、こんな楽しいことが できなくなっちゃうよ。」 ということも教えながら・・・。



自然公園に、自分たちで  
施設（遊具）を作ってしまった例



仮設の集会所でも、子どもとともに (東日本大震災から立ち上がる例)

## 「地域まなびや」と「ラジオ体操」

学校との協働活動というと、場所が学校で行われることが多い。しかし、これだけでは「地域の子は地域で育てる」とは言っても、[学校に足を運べない人は活動できない。](#)

そこで、夏休みを利用して、生涯学習課と学校が協働して、地域の集会場での学びや遊びの場を作ったり、ラジオ体操では地域の人とともに実施できるようにセットしたりした。

- 地域の人が集会場のカギの開閉管理して、子どもたちが学べる場を設定。  
勉強を見てあげたり、勉強が終わった子には遊んだりすることも。  
地域担当の教師がついたりすることも。

- 子どももラジオ体操と同じ場で行う。  
地域ではラジオ体操を行っている高齢者も少なくない。そこで、  
子どももラジオ体操と同じ場で行うようにし、地域の人へのあいさつなどを通して交流。



## 仮設の集会所でも、子どもとともに（詳細です）

被災当初はで仮設住宅に住んでいた人が、すこしずつ「終の棲家」である自前の住居や復興公営住宅に住むようになってきました。本来ならば喜ぶべきことなのに「ここはさびしい、仮設は良かった」と密閉されて声が聞こえなくなったドアを恨めしそうに見ているという例を多く聞きました。特に、マンションに住んだご高齢の人の中には、せっかく抽選に当たって入居したものの、元のコミュニティの人がほとんどいなために知り合いもなくなってしまうという状況が生じてしまいました。住宅ができただけでは決して幸せになれない、復興は終わっていないということを強く感じました。このことは、子どもの社会でも同様でしたが、子どもには毎日を過ごすことができる学校という空間がありましたので、統合された学校ですぐに友だちを作れているようでした。

復興住宅で、知り合いも少ないままの日々を送っている人たちがいるという実態があることを踏まえたうえで、地域の人と子どもが触れ合える場にすることを少しずつ実践し始めたきっかけが「地域まなびや」でした。

学校と地域の協働活動というと、「活動場所は学校」であることが多いものです。これだけでは「地域の子は地域で育てる」とは言っても、学校に足を運べない人はほとんど活動できません。そこで夏休みを利用して、地域の集会所に学びや遊びの場を作ったりラジオ体操では地域の人とともに実施できるようにセットしたりしました。学校へ行くための通学バスも夏休みの間は運休でしたから、地域内に学校の役割を担う場を作る必要があったのです。

決められた日の早朝に、地域の方が交代で集会所の鍵を開けてくれます。子どもは、決められた時間に来て帰るまで宿題をやったり、遊んだり地域の方と話したりできます。なかには宿題を見てもらったり教えてもらったりしている子もいました。復興支援ボランティアの大学生が来てくれたこともありました。また、学校内の校務分掌でそれぞれに地域担当の教師が決まっていますので、教師が見回りに来てくれたり電話で様子を聞いてきたりすることもありました。

地域では、一年中ラジオ体操を行っている高齢者も少なくありません。そこで、学校からの呼びかけで夏休みの間は子どももラジオ体操を同じ場で行うようにして、地域の人へのあいさつなどを通して交流するように指導しました。

この2つとも、馴れない大人との触れ合いには子どもたが戸惑うことが多いと思われましたので、学校で学年の実態に応じて十分指導していただきました。とくに、リーダーとしての活動を要請された上級生には、マニュアルを作つて無理なく活動できるようにもしました。

## 子どもにも大人にもこんないいことが

このような活動を通して、子どもたちの学習や教師の負担軽減に寄与しただけではなく、地域の人の生きがい（生涯学習）にも少しづつ成果が出始めています。

地域の集会所ならば通うのに時間もかかりません。また住んでいるところもそれほど離れていないので通いやすいのは言うまでもありません。また、日常生活で子どもと大人が顔を合わせることもあるでしょう。そのようなときに活動を通して親しくなった大人と子どもがあいさつなどでも関わることができます。運動会などの学校行事で応援に行ったときにも「この子はよく知っているよ」と、新しくできたコミュニティの子であっても初めから打ち解けている場面もありました。

私自身の復興支援は2年間で終了しましたが、このような活動がうまく機能するならば、子どもと親しくなった大人が近くにいるということで良いことがいろいろと想定できます。

子どもにとって、

- (1) 地域でも見守りがあるので、防犯も含めた安心の生活につながる。
- (2) 異なる年齢集団での遊び体験ができ、大きい子は小さい子の世話をまた小さい子は年上の子の言ふことを聞いて動くことができる。
- (3) 長い休暇であっても規則正しい生活習慣を身に付けながら成長していく。
- (4) 知らない大人（高齢者も含めて）と関わる力が育ち、ほかの人の立場に立つ経験をくり返して人の思いに気づく。
- (5) 自分の考えを友だちに上手に伝えたり相手の話を聞いてあげたりする力も育つ。
- (6) さらには、新しく住むことになった地域であっても、地域に寄り添ったかかわりによって地域への愛着を持つようになったり、大人になったときに地域活動に前向きに参加したりするための練習の場となる。

大人にとって、

- (1) 新しくできたコミュニティでは、地域活動の担い手がすぐにはみつからないということを聞きます。でも、子どもを核にした活動をすることで知り合いができた人たちで、地区コミュニティづくりの一端を担うことにつながる。
  - (2) 子どもを通して大人同士も互いに顔見知りになって、震災の被害というつらい体験の後の生活を共に乗り越える仲間ができる。
- といった数多くのメリットがありました。



共通の場所で知り合った人たちによる  
発展的な活動



シャッターの下りた商店街では、  
リサイクル品で工作教室を始める  
人がいます

使う側は、行政の立場もわかった上で、  
大人としての対応をしていこう。